月の形見－舞台台本

神原　涼

月の形見

題名：月の形見（能「花筐」より発想を得る）

これは架空の舞台脚本である。

出演者も、私の中で勝手に配役をした夢。

青年：　尾上松也–歌舞伎役者
女：　真飛聖–元タカラヅカ男役（現在は女優として活躍）

「尾上松也／新傾龍（SinKaRon）Vol.1『ハナガタミ』 ～能曲『花筐（はながたみ）』より～」
この舞台を観たときに、脚本の酷さに悶々とした。
歌舞伎役者の尾上松也が生きる脚本を書いてみたいと思った。
それを受け止めるには、タカラヅカで男役だった真飛聖がピッタリだと思った。

私の単なる趣味で書いた脚本である。
2014.07.23 Wed

月の形見–本編

月灯りだけの丘の上（月は見えていない）。
被衣（かずき）を被った黒髪美しき女が、月の方を見ながら立っている。
（斜め後ろの姿で顔はよく見えない）
笛の音が悲しく美しく流れ、女は月の方を見続けながら、笛の音の響きを表すごとく、
踊るようにせつなく辛い気持ちを月に訴えているような情景。
その場で悲しみにくずおれていく女。

（灯りは徐々に消え、暗闇の中笛の音だけが聞こえる）

パッと明かりが、背中を見せているソファから顔だけ出した青年の顔に。

青年：（ひとり言をつぶやくように）　まただ・・・
（戸惑うような、不安に満ちた青年の顔）
青年：あれは・・・　なんで・・・　あれは・・・
（暗闇の中から声だけ聞こえる）
女：気がついた？
青年：（自分の頭の中の会話のように）気がつく？　何に？　何を・・・

部屋の明かりがついて、女が水の入ったグラスを持っている。
女は40代前半くらいで、凛とした雰囲気。

女：水飲む？
青年：へ？
女：ミ・ズ！　飲・み・ま・す・か？
青年：あ・・・あの・・・
女：（ちょっと苛ついたようにグラスを持たせ）飲みなさい！
青年：あ・・・は、はい・・・　（渡されたグラスをつかむが目はグラスを見てはいない）
女：飲みなさいったら！
青年：　は、はい。（ちょっと怯えて女を見たまま水をいっきに飲み干す）
女：（空になったグラスを青年の手から取って）
　　はい！　それじゃ、帰って。
青年：え？
女：えじゃなくて、帰って。
青年：ど・・・どこへ？
女：あなたの家。

青年：僕の・・・家・・・
女：泊めないわよ。私、男を部屋に泊めない主義なの。
　　主義っていうか、まあ、とにかく、帰って。
青年：あの・・・
女：なに？
青年：ここは・・・　どこですか？
女：私の部屋です。
青年：　あなたの・・・　なんで・・・
女：言っとくけど、何もなかったから。
青年：何も？　何が？
女：何がって・・・　もういいから、さっさと帰って。
青年：帰る・・・　どこへ？
女：（ニッコリ笑うが苛々している）あなたのお家。
青年：それは・・・　どこですか？
女：私が知るわけないでしょ！　さっさと帰りなさいよ！
青年：あの・・・　僕は・・・　なんで・・・　　ここに・・・
女：（やれやれといった風にため息をついて）憶えてない！・・・と。
青年：（恐々とした風に首を振る）
女：説明しなきゃダメ？
青年：できれば・・・
女：たいしたことじゃないんだけど？
青年：それでも・・・　できれば・・・　お願いします。
女：長いかもよ？
青年：聞きます。
女：聞きますって、私が話したくてしかたないってわけじゃないわよ！
青年：（すがるような目で）お願いします。
女：もう・・・　（ひとり言のようにつぶやいて）めんどくさいなあ。
　　（一人掛けのスツールに座る）
　　私も初めて行ったバーがあるのね、今夜そこで飲んでたわけね。
青年：はい。
女：たまたまとなりにあなたが座って、飲んで、なんか、話して・・・
青年：何の話を？
女：何の話？　えっと・・・　憶えてないわよ！　たいした話じゃないわよ、そこじゃないわよ！
青年：どこですか？
女：どこって、だから・・・　あなたが酔いつぶれちゃったのよ！
青年：僕が？　何を飲んだんですか？

女：何って、ビールと、ハイボールと・・・　あと、なんだっけ？　それはどうでもいいの！
青年：あ、はい・・・
女：店の人もあなたのこと知らないし、身分証明証みたいなものもないし。
　　あ、悪いけど、ポケットの中全部見たからね。
青年：はい。
女：置いていこうと思ったのよ。
青年：そんな！
女：そんなって、あんた、私の部屋にいるでしょ！　置いてかなかったでしょ！
青年：ありがとうございます！
女：お礼言われても・・・
青年：優しいんですね。
女：（ハァ～？という顔をして）あのね、置いていことうしたのよ！
青年：そんな！
女：置いてかなかったでしょ！　なんでだか知ってる？
青年：あなたが優しい人だから。
女：ちがうっ！　あんたが、「置いていかないで！」って泣き叫んだのよ！
青年：え？
女：え？じゃないわよ！　私の腕にすがってオイオイ泣くのよ!?
青年：僕・・・が？
女：あんたが！　なんかもう、まるで若いツバメを捨てようとしてる女みたいっていうか、
　　我が子を捨てる母親みたいっていうか、そんな目で店中の人が見るのよ！
青年：ハハハハ！
女：　笑った？　今、あなた、笑った？
青年：笑ってません。
女：笑ったわよ！　まあいいわ。　それで、とにかく酔いが覚めるまでと思って連れてきたの。
青年：そう・・・だったのか・・・
女：さ、帰って。
青年：あの・・・・
女：なに？　あ！　電車賃？　電車はもうないわ、タクシー代？　そうよね、財布も持ってないもの。
　　なんで、私がこんな・・・　まあいいわ、ほら。（財布から一万円札を出して差し出す）
青年：（戸惑った顔で差し出されたお札を見て、そして困ったように女の顔を見る）
女：なに？　足りない？　やだ！　イヤよ、北海道から来たとか言わないでよ？
青年：あの・・・
女：なに？
青年：わからないんです・・・
女：今度はなに？

青年：僕は・・・　どこから来たんでしょうか？

（困惑した顔で見つめ合う二人）

女：あの・・・ね？
青年：はい？
女：（無理やり微笑んで）警察・・・　呼んでいいかな？
青年：（泣きそうな顔で）僕、何か悪いことしましたか？
女：そ、そういうことじゃなくて、だって、ほら、あの、迷子？
青年：僕は迷子なんですか？
女：まあ・・・　そう・・・でしょ？
青年：でも・・・　警察は・・・
女：なに？　警察がイヤだって、何かわけでもあるの？
青年：わけ・・・っていうわけじゃ・・・
女：まさか・・・　前科があるとか？
青年：ぜんか？
女：（警戒しながら）警察に捕まったことがあるとか？
青年：ない
女：（ちょっとホッとする）
青年・・・と思います・・・
女：やっぱり警察に行った方がいいわ！
青年：待って！　待ってください！　もう少し！　もう少し時間をください！
　　そうしたら・・・　きっと・・・　思い出しそうで・・・
女：（どうしようか迷って）でも・・・　まあ・・・　そ、そうね、まだ酔いが覚めてないのかも・・・
　　でも・・・　できれば、早く思い出してくれない？
青年：がんばって・・・は・・・みます。
女：が、がんばって。

–沈黙の中、それぞれが何か考えている。
　女が青年の方を見る–

女：思い出した？
青年：そんな急には・・・
女：まあ、そうね・・・　お水飲む？
青年：お腹ガボガボで・・・
女：でもね、お水いっぱい飲んで、トイレに行ってアルコール流した方が酔いが覚めるのよ。

青年：あ、はい、がんばっては・・・みます。
女：そ、そうね、まあ、がんばって。
　　（時計をチラチラ見て）あのね・・・
青年：はい。
女：　私、明日会社があるのよ。
青年：はい。
女：もう寝ないと、身体がもたないの、言ったかしら？　私、40なの。
青年：え？　そうなんですか？
女：そうなのよっ。
青年：もっと若いと思ってました、40には見えなかった・・・
女：え？　そう？　（一瞬その気になりかけたが信じない）お世辞言ってもダメよ！
青年：いや、本当に。　若いです。
女：（冷静を装いつつ、嬉しさを隠しつつ）　まあ、お世辞でも、ありがとう。
青年：（真剣な顔で）お世辞じゃないです！
女：（青年のあまりの真剣さに逆に驚きつつ）あ・・・　と、とにかく、私は寝ないといけないの。
青年：はい、寝てください。
女：（ひとり言のように）あんたに言われなくても寝るわよ。
　　それでね、私は、あっちの寝室で寝るから。
青年：はい。
女：入ってこないでよ！　鍵かけるけど！
青年：入りません。
女：あんたは、ここで・・・　なんていうか、酔いを覚まして、できるだけ早く。
青年：はい。

–女は寝室に向かおうとして–

女：あ！（青年のところに戻ってくる）
　　髪の毛一本抜かせて。
青年：イテッ！
女：（抜いた髪の毛をかざし）あんたが悪いことして逃げたら、これでDNA鑑定してもらうからね！
青年：すごいなあ！　頭がいいんですね！
女：40まで一人暮らししてたら、自分のことは自分で守らなきゃ生きていけないのよ！
青年：（すっかり感心している）
女：それじゃ、おやすみ。じゃない！　早く酔いを覚まして。じゃ！（ソファの傍のランプをつける）

青年：（女の背中に）おやすみなさい！
女：（一瞬ドキッとしたように立ち止まるが、振り向きもせず寝室に入る）

–ランプの灯りだけの部屋で、青年はソファに横たわる。
　微かに笛の音が聞こえる。
　青年がソファから顔を出す。
　その顔は、今までの顔とは違う女のような顔。
　嬉しさと戸惑いが混じった顔で、女のいる寝室の方を見る。
　ソファから立ち上がり、女の寝室のドアの方に行き、思い直したように戻り、
　それを何度か繰り返し、ためらいがちに、女のドアを小さく叩く。

青年：あの・・・　（その声は、さっきまでの声とは違い、少しキーが高い）
女：（ドアのむこうから）なに？
青年：い、いえ・・・　なんでもないです・・・

–女がドアを開けて出てくる。

女：どうしたの？　思い出した？
青年：あの・・・　聞いてほしいことがあるんです。
女：なに？　（部屋の明かりをつけようとする）
青年：あ！　明かりは・・・　このままにしてください。
女:（ちょっと警戒しながら）　で？　なに？

–青年はソファの前に正座する。
　女はそれを見て、戸惑いながら、ちょっと離れたところにしゃがむ。

青年：昔・・・
女：昔？
青年：昔・・・　ずっと・・・　はるか・・・　昔・・・
女：（ひとり言のようにつぶやく）まだ酔ってるのかしら？
青年：ある国に・・・　男がいたんです。
女：（ひとり言）ああ、酔ってるわ。
青年：その男は、国の中で、誰よりも聡明で、統率力があって、皆から慕われていたのです。
女：（ひとり言）寝たいんだけどなあ・・・
青年：その方は、まるで絵から抜け出たように凛々しく美しく・・・
女：かっこいいってこと？
青年：（照れたように頬を赤らめ頷く）

女：（その様子にちょっと引き、口だけで）ゲイ？

青年：彼には愛する女がおりました。その女も彼を命よりも尊き御方とお慕いしておりました。

–女は、半ばあきらめて、あぐらをかいて青年を話を聞く。

青年：永遠（とわ）に添い遂げようと契（ちぎり）を交わした・・・　その翌日・・・
（青年の目が涙で潤んでくる）その方は・・・　政敵の罠にかかり、遠い・・・
遠いところへと追放されることになってしまったのでございます。
嘆き悲しむ女に、その方はおっしゃいました。
「ご覧、あの月を」
輝く半月を指さしておっしゃったのです。
「どこにいようと、おまえと私は同じ月を見ることができる。
おまえが、あの半月を見るときは、こう思ってくれ。
あの月の半分は、私がおまえの形見として胸に入れているのだと。
私も、半月を見たら、おまえが私の形見として、おまえの胸に入れているのだと思う」と
。

–女は青年の話に引き込まれていく。（明かりは青年だけを映し出している）

青年：その夜から、女は半月を見るたびにその方を思い、
恋しさと淋しさに泣き暮らしておりました。
何度も命を絶とうとさえいたしました。
あるとき、女は、その方のもうひとつの言葉を思い出したのでございます。
「たとえ今生で、もう二度とおまえに会えなかったとしても・・・
時を越え、何度生まれ変わっても、おまえを愛し続けている」と。

–笛の音が微かに聞こえてくる。

青年：あの方のその言葉を思い出したとき、女は心に決めました。
時を越え、何度生まれ変わろうと、あの方を探し、今度こそ添い遂げたいと。
なんとかその思いを成し遂げたいと、霊験あらたかと御高名なお坊様のところへ、
侍女と共に、幾月もかけて訪れ、お願いをいたしました。
なにとぞ、この思いを成し遂げる力をお与えくださいましと。
なにとぞ、あの方を探し出す力をお与えくださいましと。
けれど・・・
お坊様はおっしゃられました。

女：「来生で・・・おまえは・・・今生のことはすべて忘れ去る・・・　（声が低い）
　　それが仏の慈悲だ・・・おまえの親が前世でおまえの敵（かたき）であったらどうする・・・
　　おまえの兄弟が、おまえの愛しき女であったらどうする・・・」
青年：どうして・・・　それを？（不思議がってはいない）
女：（ハッと我にかえったように）え？　ただ・・・　なんとなく浮かんで・・・
　（ひとり言）私・・・　そのお坊さんだったのかしら？　だからいまだに独身？
青年：それでも、女は、けして、けして忘れまいと心に決め、幾度（いくたび）も生まれ変わり、
　　時を越え、彼の人を探し続けてまいりました。
　　半月が・・・　心の支えでございました。
　　彼の人の形見は・・・　たとえ何度生まれ変わろうとも、たとえどれほど時が過ぎゆこうとも、
　　必ず夜の空に現れるのですから。
　　そして・・・　やっと・・・　やっと見つけたのでございます。
女：え？
青年：その女とは・・・　私でございます。
　　そして、彼の人は・・・　あなたでございます。

–女と青年、しばし黙って見つめ合う。

女：あんた、まだ酔ってるわ。
青年：信じていただけないのは覚悟の上でございました。
女：いやいやいや、覚悟とかそういう
青年：では、お聞きしとうございます。
女：な、なに？
青年：先ほど、お坊様のおっしゃられたことを、なぜ貴方様はわかっていらしたのでございますか。
女：え・・・　さ、さあ・・・　まぐれ？
青年：彼の御方は、追放の道中、そのお坊様のところに行き、私と同じことをお願いしたのです。
　　そして、お坊様は、彼の御方へも同じことをおっしゃられたと、おしえてくださいました。
　　それを聞いたとき、私は、彼の御方も同じ思いであったかと、それは嬉しく、
　　そして、なればこそ、必ずや、またお会いできるであろうと思ったのでございます。
女：はぁ・・・
青年：（女に抱きつき）我が君様！　お会いしとうございました！

　　ずっと、ずっとお探し申しておりました！　もう二度と離れとうはございません！
女：ちょ、ちょ、（なんとかもがいて青年を引き離す）ちょーーっと待って！
青年：彼の君様！（また抱きついて押し倒してしまう）
女：ちょっ、ちょっと！　あんた！　女のくせに力強いっ！　あ、男だ、　どっちでもいい！
　　は・な・し・てっ！（足でバーンと蹴る）
青年：我が君様・・・
女：そんな泣きそうな顔されたって、こっちだって、あ、こ、来ないで、待って！
青年：はい。
女：（落ち着くために深呼吸して）あのね
青年：はい！
女：たとえば・・・　百歩譲って、何歩譲ればいいのかわかんないけど、とにかく、
　　もしも、もしも、もしかして、私が、あんたの言う、その、男の人だとして・・・
青年：間違いございません！　我が君様でございます！
女：あぁぁ、はいはい。
青年：私が、我が君様を見間違うはずがございません！
女：あぁぁ、はいはい、で、だとして、問題はね・・・
青年：はい？
女：私、ぜんぜん憶えてない。
青年：我が君様、ご心配あそばしますな、私がお助け申し上げます。
女：お助けって、どうやって？
青年：私がずっとお傍におつかえ申し、思い出していただけるよう努めます。
女：ハ？　どういうこと？
青年：（はにかみながら）今度こそ・・・　永遠（とわ）に、添い遂げるのでございます。
女：添い遂げる？　えっ？　それって・・・　結婚するってこと？
青年：はい。
女：え、ちょ、ちょ、ちょっと、私、あんたのこと、なーーんにも知らないから！
青年：きっと思い出していただけます。
女：いや、あの、そうじゃなくて、今の、その、男に生まれ変わった、その、あんたのこと。
青年：（身体を指さして）この者でございますか？
女：この者って、そうよ、今は男でしょ？
青年：（愉快そうに笑って）いいえ、私は男ではございません。
女：男じゃない？　どう見ても男でしょ！　ちょっと、胸のところ、開けて。
青年：我が君様・・・　（恥ずかしそうに顔を隠す）
女：見せなさい！
–青年は恥ずかしそうにシャツの胸元を開ける。
女：ほらあ！　男！　しかも胸毛生えてるし！
青年：　この者は男でございますが、私は違います！

女：つまり・・・　中身は女のまま、男として生まれ変わっちゃったってこと？
青年：いいえ、私は生まれ変わってはおりません。
女：ハ？
–女はしばし考える。
女：今まであんたが言ってたことって・・・
青年：はい？
女：冗談？　騙した？　こんな夜中に⁉
青年：騙したりなぞはいたしません！　本当のことでございます！
女：あんた、自分は生まれ変わってないって言ったじゃない！
青年：我が君様、お聞きくださいませ。
女：聞いてるでしょ！　バカみたいな話をっ！
青年：貴方様は、今生は女として生まれ変わりにおなりあそばしました。
女：あそばしてるわよ！　これでもれっきとした女よ！
青年：けれど、私は・・・
（青年の顔が暗く、遠くを見るような目に変わり・・・）
　　私は・・・　貴方様を探し続け・・・　時を彷徨い・・・　情念そのものとなり・・・
　　この者の身体に入ったのでございます。
女：入った？　出たり入ったり？　幽霊？
青年：いいえ！　貴方様を恋い慕う心そのものとなったのでございます！
女：（しばし青年を見つめ、そして）　わかんない、言ってる意味が、まったくわからない。
青年：（身体を指さし）この者は、人間でございます。
女：安心させてくれてありがとうっ。（明らかにイラッとしている）
青年：この世界で、貴方様を見つけましたとき、私には身体がございませんでした。
女：（ギョツとしてたじろぐ）
青年：貴方様と、誰にも覚られずお会いすることができるのは、昨日（さくじつ）のあの時間だけ、
　　そして、この身体を持ったこの男だけでございました。
　　私は、この世界で言いますところの、何年も前から、時折この者の身体に入り、
　　貴方様と会う支度を整えていたのでございます。
　　この者は、その都度私の影を見てはおりましたが、
　　私が入っていることに気づいてはおりません。
女：あんたが・・・　操ってるってこと？
青年：いいえ、私が入っている間は、この者は眠っていると思っております。
女：それじゃ・・・　今も・・・　その身体の持ち主は、自分が眠ってると思ってるわけ？
青年：はい。
女：それじゃ・・・　もし・・・　私が、その身体に入ってるあんたと結婚したとしたら・・・
青年：我が君様！（嬉しそうににじり寄る）

女：その身体の持ち主は・・・　ずーーっと眠ったままってこと？
青年：はい。
女：それって・・・　人権侵害じゃない？
青年：それは・・・　何のことでございますか？
女：その身体の持ち主だって、彼なりの人生があるはずでしょ。
　　カノジョだっているかもしれないし、友だちだって、あ、そうよ、親だって！
　　その身体の持ち主って何歳？
青年：　三十でございます。
女：30!?　10個も年下ーーっ？　あーー、ムリムリ！　私、年下は趣味じゃないの。
青年：けれど、私と貴方様がお別れしたときは、私が十六で貴方様は二十六でございました！
女：だからっ、昔のことじゃなくて！　今！　現在！　21世紀！
青年：さほどに年月が経ち、やっと・・・　やっと出会えたのでございます！

–女はどうしたらいいのか、考えて・・・

女：もしも・・・　もしも、あんたの話が本当だとして・・・
青年：我が君様！　私は、本当に
女：（手で制して）私が、追放された彼だとしたら・・・　私だったら・・・
　　自分が愛した人が、そんな、人のことを利用するような、自分の思いを遂げるために、
　　他の人の人生狂わせるようなことをするのは、許せないわね。
青年：我が君・・・様・・・
女：私だったら・・・　愛する人が、私のためにずっと彷徨っているのは辛いわね。
　　まだ16歳だったんでしょ？
青年：はい・・・
女：まだこれからって歳じゃない。いくらだって、しあわせになれたはずよ。
　　他の男の人と一緒になって、子どもだって・・・
青年：私は、あなた以外の方など・・・
女：縛ってしまったのね、あなたを。私かもしれないし私じゃないかもしれないけど。
　　もしも私が彼だったら、きっとこう言うわ。
　　「もう私を忘れて、しあわせになってくれ」って。「それが私のしあわせでもある」って。
青年：（ただ涙を流して女を見ている）
女：きっとこう言うわ・・・　「私のことはもういいから。楽になって」って。
青年：本当・・・に・・・？
女：本当に。

–青年は涙の流れる目で女を恋しげ悲しげに見つめ・・・

青年：ひとつだけ・・・　お願いがございます・・・
女：なあに？
青年：今いちどだけ・・・　抱きしめてはくださいませんでしょうか。

–女は微笑んで青年を抱きしめる–

青年：我が君様・・・　貴方様は・・・　もうすでに・・・
女：言わなくていい。
青年：嬉しゅうございます・・・

–女と青年は見つめ合い、青年はまるで息を引き取るように目を閉じる。

女：どうしたの？　ねえ！　どうしたの？

–青年が眠たそうに目を開けて、女を見て、
青年：ワッ！
女：どうしたの？　大丈夫？
青年：えっ・・・　あの・・・　誰っスか？
女：え？
青年：（部屋を見渡して）えっ？　ここ、どこだ？
女：憶えてないの？
青年：あのぉ、俺、なんでここに・・・ていうか、何があったんスか？
女：え？　今話してたこと、憶えてないの？
青年：ハ？　俺、寝てましたよね？
女：寝てないわよ！私と話してたじゃない！
青年：あ！　寝言に話しかけると寿命縮まるって誰かのツイッターに書いてた！
ひでえなあ！　寝てるときに話しかけてたんスか？
女：彼女は？
青年：カノジョ？　なんで今その話なんスか？
女：彼女はいないの？　消えちゃったの？
青年：消えたっつうか、（ムスッとして）フラレましたけど。
　　それより、ここ、どこですか？
女：私の部屋・・・
青年：えっ？　ま、まさか・・・
女：憶えてないの？　本当に？
青年：あ・・・　すみません・・・
女：彼女は？　彼女のことも？　私のことも？

青年：カノジョのことは憶えてますけどぉっ、フラレたんですっ。
　　あなたのことは・・・　あれ？　どこかで・・・
女：憶えてる？
青年：あ！　ああ！　あのシャレたバーで会ったおねえさん！
女：それは憶えてるわけか・・・
青年：で・・・　ここは・・・　どこですか？
女：私の部屋よ。
青年：あ…それで・・・俺・・・
　　（ガバッと土下座して）すみません！　俺、何も覚えてなくて！
　　その、なんつうか、あの、避妊は・・・　しましたか？
女：ハ？
青年：酔ってたから、ちゃんと・・・その・・・したかなあ・・・って。
女：そういうことはいっさいしてません。
青年：へ？
女：あなたが酔いつぶれて、置いていかないでって私に泣いてすがったから、
仕方なく、ここに連れてきただけですから、ヘンな心配しないでください。
青年：あ・・・　はぁぁぁ、よかったあ！　あ、よかったって、あの、すみませんでした。

–女は青年の目を見る・・・

女：いない・・・
青年：誰がですか？
女：ううん、なんでもない。
青年：そんじゃ、俺、帰ります。いろいろお世話になって、ありがとうございます。
女：いいけど、始発まであと2時間はあるわよ。
青年：え？　ヤッベ、まいったなあ。あれ？　財布がない！
女：あのお店にいたときからなかったわよ。
青年：マジで？　あ！　携帯もない！　ヤッベ、どこに落とした・・・　あ！　あそこだ・・・
女：場所がわかるなら、取りに行ったら？
青年：千葉なんスけど。
女：あんた、千葉に住んでるの？
青年：じゃなくて、カノジョとディズニーランド行って、お茶して・・・
女：あの国なら落し物は見つかるんじゃないの？
青年：お茶したのは駅の近くで、そこで突然別れるっ言われて・・・
女：さんざん遊んだ後で別れ話？
青年：ひどいッスよねえ！　それで俺、カーーッときて・・・　そこから憶えてないな。
女：始発まで、そのソファで寝てていいわよ、電車賃ならあげるから。

青年：あ、すいません、お借りします、必ず返しに来ますから。
女：返さなくていいわよ。
青年：いや、それはキッチリ返しますから。
女：あなたを見ると・・・
青年：え？
女：いいから寝なさい！
青年：それじゃ、すみません。
–青年はソファに寝て、姿は見えなくなる。
　女は、ソファの背にもたれて床に座る。

女：あなたを見ると・・・　辛いのよ。
　　見た目は、彼女が入っていたときと同じなのに・・・
　　目の中には彼女がいないのよ・・・
　　私のことを愛しそうに恋い慕うあの目・・・　　もう、ないのよ。
　バカみたい、あんな話、信じられるわけないじゃない。
　ちがう・・・　彼女はわかったわ、私が・・・

–ソファから白い手だけが出てきて、女の頭を優しくなでた。

女：まだいたの？
青年（彼女）声：はい・・・
女：もういきなさい。
青年（彼女）声：我が君様・・・
女：さようなら

–白い手が静かにソファの後ろへと消える。

女：「漆黒の　闇路を照らす道しるべ　我を導く　君が半月」

–女はフッと自嘲気味に笑って・・・　　（部屋は少しずつ暗くなる）

暗闇の中、被衣をかぶって座り込んでいる女。（冒頭の美しい黒髪の女）
顔をあげると般若の面。
月明かりが差しこんでくる。
ふと、その灯りを見上げる女。
そして、顔を沈め、再び顔をあげたときには美しい女の顔。

半月がくっきりと姿を現し、女は淋しげに微笑む。

終。

2014.07.23 Wed